

## 正倉院の植物繊維にかかわる工芸品について

飯塚小玕齋

昭和五十七年・五十八年と二ヶ年にわたり二回の植物繊維にかかわる

宝物の材質調査を依頼され、ここに総括した報告を行うものとする。筆

者としては工芸家の立場より技術的経験と視覚による判断をするほかな

く、植物学的材質調査は専門である植物学者嶋倉巳三郎氏・村田源氏の

御意見を重要視せざるを得なかった。但し工芸家としての視野から、工

芸品並に諸道具等の構造的説明は技術的に判断し易いもの多く、大きな

収穫であったと思われる。しかし非常に多種類にわたる調査であったた

め、これを左記の如く分類し報告し易い状態とした。

一、編組されたるもの

二、纏材又は巻材として使用されたるもの

三、植物繊維による諸種の縄

四、其の他の植物及繊維を使用したもの

五、動物質の毛等を用いたもの

一、編組されたるもの

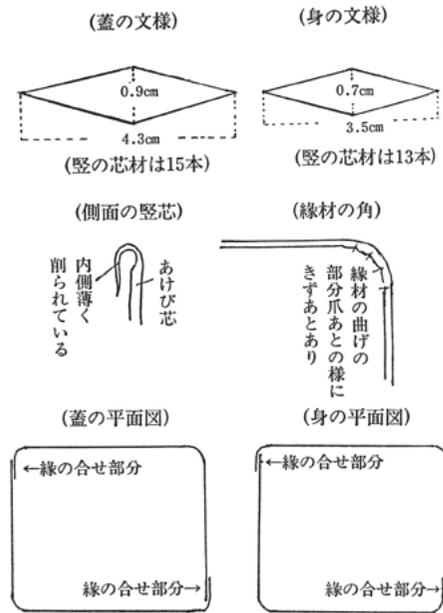
葛箱、胡禄、柳箱、蘭箱・斑蘭箱蓋、帙、筵・床畳・胡床・その他

(一) 葛箱

御書箱・白葛箱身のみ・白葛箱・赤漆葛箱・白葛箱甲・白葛箱乙

○白葛とあるは全てあけび、かなとすら、いぐさ、かやつりぐさのいずれかの植物であろう(植物学者の推定)。

箱の堅材はあけびの茎を芯として用い、平編材はいぐさ又はかやつりぐさ、と思われる。箱形に成型するためには芯材(あけび)を側面にて曲げ、



挿図1 北倉3 御書箱

平編にて縁まで編みコの字形に成型し、芯材のない両側面は芯材を側面の長さに合せ、芯材先端約三、四種を薄く削り削り天部の両側芯材に巻き込み、あげびらしき材を細くさき、その材にて縄あみにて止め、後に平編にて両側面を編み二、三種のところより四側面を平編にて廻し編みにし、箱形を成型したものと思われる。葛箱は全てこの技法である。

(イ) 北倉三 御書箱 (巻頭図版・挿図1)

寸法 蓋 縦三三・五種、横三六・六種、深六・五種、

身 縦三一・七種、横三五・〇種、高七・五種、

重量 四一〇瓦

○国家珍宝帳記載品。雑集、杜家立成、楽毅論などの容器。

◎蓋 縁材はエゴノキで縁材の中一・四種に割ったものを使用したと思われる、縦の縁巻は五ヶ所(四本・五本・四本・五本・四本)と変化ある巻止めである。

横の縁巻は五ヶ所全て四本巻止である。

○文様は菱形文様であり天部は七列の配列(四個・三個・四個・三個・四個・三個・四個)である。

側面は各共に二列、三個・四個で表わす。

○菱文は赤(紅)色に染めてあるが、不思議に上部の色が濃く鮮明であり、下部は薄い。退色したとすれば各文様同じ状態であるべきと思われる、計画されたものか疑問である。

◎身 縁材は蓋と同じで巾寸法一・四種。

但し縁巻は縦五ヶ所(各五本)巻止め、横五ヶ所(四本・五本・五本・四本・五本)巻止め。四ヶ所(各五本)巻止めの箇所は一ヶ所が欠落と思われる。

○菱文は赤(紅)色に染め、下部が濃く鮮明で上部は薄い、蓋文様と反対の状態である。計画的であれば優れたデザインと思われる。文様の配列は底面に七列(三個・四個・三個・四個・三個・四個・三個)

側面は縦・横共に二列で、上部より三個・四個の配列である。

○蓋・身の側面の文様は配列に変化を見せて居る。

(ロ) 中倉二三 葛箱・柳箱残欠の内白葛箱身のみ仮第一号 六九号櫃

寸法 縦四六種、横四三種、深一一種

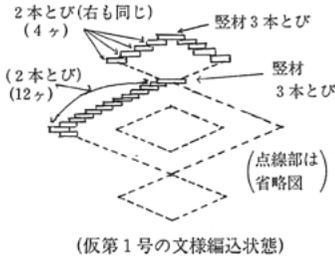
○箱の側面には菱文様を表わし縁に墨書「東大寺」「東大寺会後片」とある。破損してはいるが観察し得る状態である。材質は堅材・編材共にあげび類の茎で、箱全面平編で表側面各々に三個の松皮菱文の如き文様(挿図2)を編出し、技術は優れている。底面には文様なし。

○縁材はえいごの木で巾二種、堅材を内と外からはさむ(厚さ外縁一耗・内縁三耗強)。縁巻は各辺七ヶ所七本巻止めである。縁の破損部分を観察すると堅材は縁折をせず切りはなしたままである。

(ハ) 中倉三八 白葛箱 (挿図3)

寸法 蓋 縦二四・〇種、横三四・八種、高六・二種、  
身 縦一一・八種、横三三・六種、高六・三種、

左図は堅材に対して編み出しの本数を記したもので、二本・三本飛んで編むことにより文様を表現している。



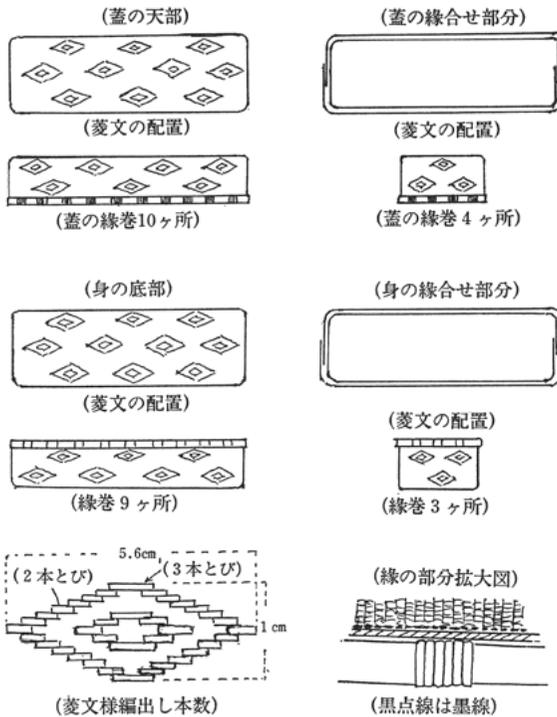
挿図2 中倉23 白葛箱 仮第1号 菱文

○美しい長方形の箱で破損なく技術も優れている。蓋・身共に二重菱文を編出し編材は堅材・平編材共にあげび材である。

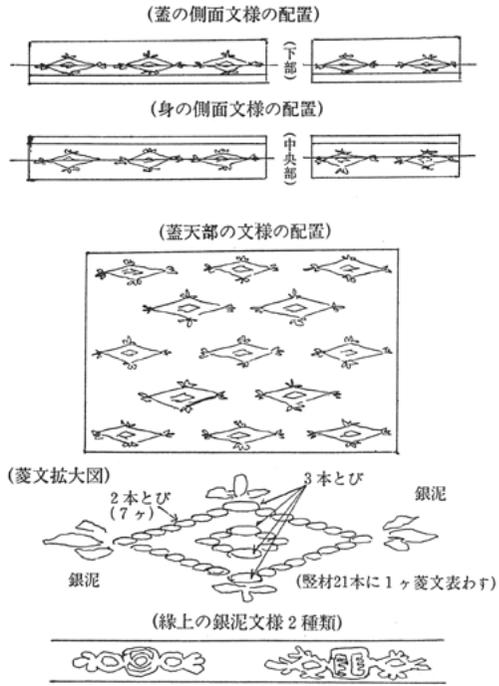
○菱文様は蓋・身共に表わされ、蓋は天部三個・四個・三個、側面横は上部より四個・三個、堅側面は一個・二個の配列。身は、底部は蓋と同じ配列で、側面横は上部より三個・四個、堅側面は二個・一個の配列で蓋と反対に変化させている。

○縁材は蓋・身共にえいごの木である。巾一・五種。縁上のあて材は柳の丸材を使用している。縁巻は巾一・五耗一・二耗のあげび材で巻き、蓋の縦辺四ヶ所、横辺一〇ヶ所、身の縦辺三ヶ所、横辺九ヶ所、六本巻止めで巻止めてある。

○縁下はひご一本を通して巻縁に巻止め、縁巻きのかくしとし、デザイン上の装飾としている。巻縁の下部に細い墨線が観察されるのは恐らく編目のあたりか巻縁の目やすであらう。



挿図3 中倉38 白葛箱



挿図4 中倉44 赤漆葛箱

(二) 中倉四四 赤漆葛箱 (挿図4)

寸法 蓋 竪三五・二種、横三五・一種、高六・〇種、

身 竪三四・二種、横三三・八種、高六・六種

○箱全面に赤漆を塗り菱文を編出し、文様には銀泥で加飾し、縁は赤漆で塗りその上に処々に銀泥で花文様を描いた華麗な箱である。箱内には白紙の覗(うちばり)があって、その上に羅を貼った折立(かたど)を具している。折立は表白羅の上縁に緋夾纈繩を繞らし、裏には白繩をつけたものである。御物目録にはこれに墨を納めていたと記されている。

○総体の材質はあげび材を使用したものと思われ、縁材は他の例から推察すれば、えごの木であろう。しかし破損もなく漆塗であるため観察は

不可能である。

○蓋 天部菱文一三個(三個・二個・三個・二個・三個)の五列の配列  
側面菱文竪二個・横三個を一行に配列

身 底部文様なし、側面横三個・竪二個

○菱文の配置は蓋は縁の近くの下部に表わし、身は中程に編出している。これはデザインに於て変化と共に、蓋を装着した状態で観賞すると身の文様が全くかくれる様に配慮され、しかも蓋の文様が下方に表現されているため非常に安定した姿に見られる。誠に心にくいデザインである。

○編組された菱文に銀泥を施した理由は恐らく漆を塗られた文様が判別し難い状態のために、より装飾性を強調するための手段であろうし、他の葛箱と違った創作性を持たせるためかとも推定される。

○縁は黒色に見えるが赤漆を濃く塗ったものか又は下地に墨色を塗り其の上に赤漆を塗ったものか不明である。その上に銀泥にて花文様を描き、菱文の銀泥表現と調和をとっている。縁巻はあげび材と思われ蓋・身共に竪五ヶ所、横七ヶ所七本巻止めで巻かれている。縁巾蓋一・一種、身一・〇種

(六) 中倉一三二 白葛箱 甲 (挿図5)

寸法 蓋 竪三六・〇種、横三一・〇種、高八・五種

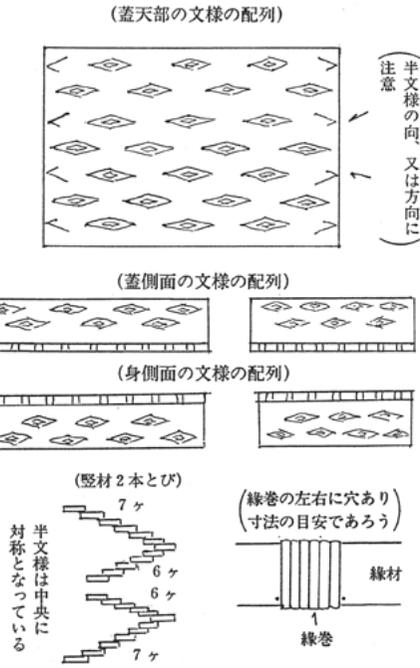
身 竪三四・五種、横三〇・五種、高九・五種

○総体保存状態良く、微かに破損の部分あるも技術優れ美しい箱である。

菱文は中倉三八と同じく二重菱文で、箱内には白麻紙を芯とする紫褐色の襷があり、蓋表には「納雅帯并刀子」の貼紙、蓋・身の縁には各「東大寺会前」の墨書がある。

○平編材はあげび材で堅芯材はあげびの丸材であろう。縁材はエゴノキであり一ヶ所節穴あり。

○菱文様は二重菱文で蓋天部は二四個（三個・四個・三個・四個・三個・四個・三個）と七列の配列で、三個の各列の両側には半文様とも言うべきか「カギ形」の文様を表わしている。側面は各面共に七個表わされ四個・三個の二列の配列である。身は底には文様なく、側面は各



挿図5 中倉132 白葛箱 甲

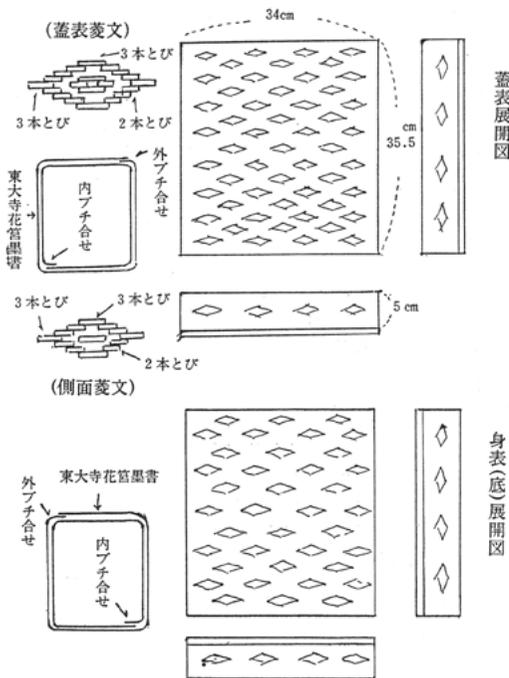
面共に七個で、上部より蓋と違い三個・四個の二列の配列で、蓋を装着した際のデザインの配慮がうかがえる。底面・蓋身の内側面には文様はない。

○縁巾 二種、縁巻材巾 二一・八耗 六本巻止で蓋縦九ヶ所、横八ヶ所、身縦八ヶ所、横七ヶ所、巻いてある。

(ハ) 中倉一三二 白葛箱 乙(挿図6)

寸法 蓋 縦三五・七種、横三四・二種、高五・〇種  
身 縦三四・五種、横三三・〇種、高五・三種

○白葛箱甲と技法・材料共全く同じであるが、菱文様に少しの違いと平



挿図6 中倉132 白葛箱 乙

編の面が横が短く、従って文様も中倉一三二白葛箱甲の箱の長手方向に対して横長に編出した文様が、この箱は縦に表現されている事になり、觀賞した場合は違った文様の位置となる。内には紙覗なく、蓋・身の縁材に各々「東大寺花筥」の墨書がある。

○平編材はあげび材であるが縁材はえごの木と思われる。縁巾二種。○文様は二重菱文であるが白葛箱甲の二重菱文と異なり、蓋は内文様が小さく又身は内文を一個の平編で表わしている。

蓋 天部 三九個 (四個・三個・四個・三個・四個・三個・四

個・三個・四個・三個・四個)を一一列の配列

身 底部 三八個 (三個・四個・三個・四個・三個・四個・三

個・四個・三個・四個・三個)一一列の配列

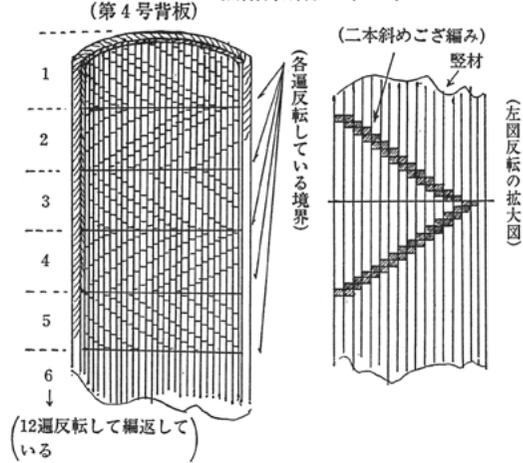
側面 蓋・身に各面四個の菱文を一一列に表わしている。

内側面 蓋身共に文様なし。

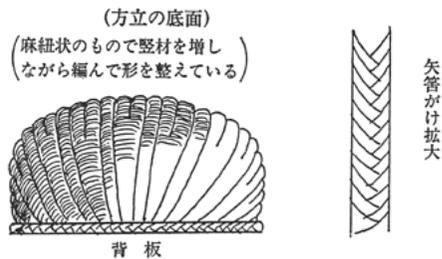
○縁巻はあげび材を細く割ったものを使用していると思われ、蓋・身共に堅八ヶ所、横七ヶ所、六本巻止めである。

(結び)以上数種類の葛箱を觀察調査の結果、当時あげびの様な蔓状の植物を研究、編組品に常に応用された事をうかがい知る事が出来、今日よりはるかに技術的にも優れていた事に大きな収穫があったと思う。又この葛箱製作上のデザインのみならぬ研究心は感銘せざるを得ない。即ち一つとして同じデザインはなく、各箱皆何れかのところに違った方法を用いデザイン上の効果をあげている。そしてそれぞれに美しさ

黒漆葛胡祿 第4号



赤漆葛胡祿 第23号



挿図7 中倉4 胡祿

を持っていて。特に細部にわたり行届いた仕事である事に注目すべきであらう。

(二) 胡祿

黒漆葛胡祿・赤漆葛胡祿・白葛胡祿・胡祿残欠

(イ) 中倉四 黒漆葛胡祿 第四号(挿図7)

寸法 全長四九釐、上巾一二釐、下巾一二釐

(造り)胡祿とは箭(矢)を束ねて入れ、背に負い戦鬨等に使用される武器である。方立(ほうだて)と背板で構成され、漆等を塗り堅牢なものから美しく優

美な造りのものまであり、材料は主にあけびを用いたものが多い。この胡禄は方立(矢を入れるところ)は平編で、背板には綾杉文を編出し、前緒・後緒・帯共に白洗皮(鹿皮)を用いる(皮は後補である)。方立の右側に「東大寺」の朱書銘がある。

○材料は籐又はあけびと思われるが黒漆塗りのため判別は困難である。方立は背板の堅材を曲げ前方に成型している。但し側面は堅材を増し共編みにしている。内側は布張りである。

○背板は二枚合せ表面は方立の部分で終り裏面は平編みで編み曲げて方立としている。表面の一面は木目、ご、あみで十二回反転しているため綾杉文となる。方立の内側は編む事をやめ、裏面の一面は平編で方立まで編み、底は糸状の材料で細かく平編にし、方立の前面はあけび材の平編と変化している。

○縁巻は芯(あけびの茎又は竹)材に矢筈がけて巻かれている。

(四) 中倉四 赤漆葛胡禄 第二三号

寸法 全長四九・五種、上巾一二・五種、下巾八・五種

(造り)黒漆葛胡禄と同じ方法の造りであるが、下巾がせまくやや細形である。総体に赤漆塗りであるが茶褐色に見える。背板二枚合せで裏面背板を曲げて方立を造っている。方立・背板共に斜め格子文を編出し前緒・後緒・帯は何れも麻繩を用いている。

○方立は破損多く修理され、後補の部分が明瞭である。底部(挿図7下)は麻ひも状のもので編み曲げ堅材を増し側面を共に編み成型したものの

か、方立の縁のほうから下部に編み出し、堅材二本を一本にまとめ、

底部を成型したものか明瞭でないが高度な技術でまとめられている。

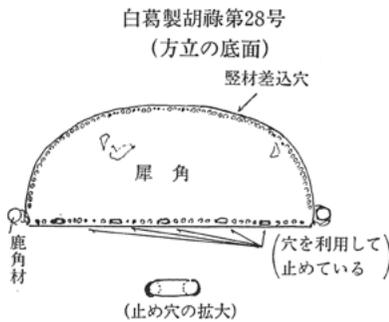
○背板二枚は縁で合せ、方立の縁と共に矢筈がけて編んでいる。

○材料は堅材はあけびの茎が、平編材はあけびの割ったものが使用されているものと思われる。

(ハ) 中倉四 白葛胡禄 第二八号

寸法 全長五七・八種、上巾一七・〇種、下巾一六・一種、

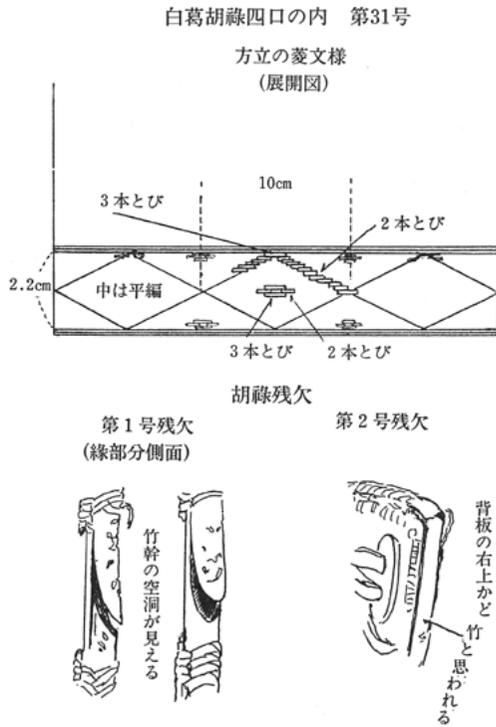
(造り)漆の塗られていない品格のある胡禄である。背板は堅材を簀子状にすかし編みにし方立の底(犀角)を使用、挿図8)に穴をあけ、方立の堅材と共に差込み成型し、方立は平編で全体を纏めている。背板の縁は女竹と思われるものを利用して、あけび材の細く紐状に作られた材料で矢筈がけて巻いている。総体に



挿図8 中倉4 白葛胡禄 第28号

籐材かと思われる。前緒は四条あり、帯執りの前緒・帯共に紫革を用いる。帯執りの根には斑犀花形の座を用いている。材料・技術共に優れ非常に繊細で優美な胡禄である。○方立は前方の部分の堅材は背板よりやや細いものを使用、犀角の底板の穴に差込

○背板は一枚で堅材は恐らく籐材と思われる、上部・中部・下部と平編を利用し一本・二本・一本と堅材を途中から加え総体の形を上広がりにし、縁材は竹又は籐の丸材(径七糎)を芯とし矢筈がけでまとめ縁の



挿図9 中倉5 白葛胡祿 第31号(上)  
中倉4 胡祿残欠 第1号・第2号(下)

下部先端に鹿の角材を装着している。

(一) 中倉五 白葛胡祿 四口の内第三一号(挿図9上)

寸法 全長三三・五糎、上巾一九・〇糎、下巾三一・〇糎

(造り) 調査した胡祿の中では特種な形で巾広く小形である。背板を簀子状に堅材を並列し、一本縄編で等間隔に編止め、底から前方に曲げ方立を共材で造り、方立の前方に文様を編出している。デザインの美しい胡祿である。材料は堅材・編材共にあげび材である。技術も優れている。

○背板上部に破損あり。方立は堅材を曲げ成型した下部に菱文を大きく三個表わし中心にそれぞれ小花文を編表わし、上部に縄六ツ目編(みじん編とも言う)で透編みにし縁で纏めている。縁は矢筈がけで、背板の縁は三本の芯材を各巻縁に巻いている。

(二) 1、中倉四 胡祿残欠 第一号

(造り) 第二八号と様式同じで格調の高い胡祿である。破損甚しく調査の際にはよく観察できた。漆塗りがなく、堅材を簀子状に縦に並べ処々に平編で編止めている。方立は欠損し残存しない。緒・帯は紫革を使用。台座は菊の葉を彫刻した犀角を用いている。

○材料は全てあげび材であるが、縁材はたまたま縁巻欠損のため、継ぎの部分が表われて斜めに曲線を描く様に切込のあることが観察された(挿図9下左)。芯材は矢竹と思われる。誠に当を得た削りである。丸竹を曲げる技術は難事であるにもかかわらず既にマスターして居た事

は特筆すべきであろう。縁巻は矢筈がけである。

## 2、中倉四 胡禄残欠 第二号

(造り) 破損甚しく方立は底部欠損し観察不可能である。背二枚合せと思われ、全て平編みで緻密に編み、文様はなく総体漆塗りである。完全な状態の時は恐らく堅牢で美しい胡禄であったと思われる。

○背板の上部の形は種々あるが、この胡禄は角が直角に形造られている。角の欠損部分(挿図9 下右)を観察すると芯材は竹で、これは丸竹でなく約二耗厚に削られた皮付平割竹であった。この直角曲げの技術も難事であって折れて剝離するのだが、損傷が少いところを見ると竹が柔軟なものと思われる。縁は矢筈がけである。

○緒・帯の座は白犀角で総体の材はあげびである。

(結び) 以上胡禄六點(内二点破損甚しきもの)を調査終り、やや似た造りのものは第二八号と残欠の第一号であるが、それとて方立の造りが異なり、六點総て違った造りであった。漆塗りの胡禄第四号・第三号・残欠第二号は堅牢で恐らく実戦に使用されたものであろう。他の三点は軽く品良く造られ装飾的である。しかし第二八号の如く方立の底に犀角を利用したものは身分の高い武人の使用したものとわれ、非常に工芸的で技術的であるところは参考になるところ大であり感銘させられた。当時あげび材を多く利用した事も注目すべきであらう。

## (三) 柳箱

柳箱・赤漆柳箱・柳小箱

## (イ) 中倉九一 柳箱

寸法 蓋 径二四・五、高五・五  
身 径二三・五、高七・〇

(造り) 円形被せ蓋の柳箱で、材を麻糸で編んだ今日の柳行李と同じ造りである。蓋の中央に菱文五個をまとめ一個の大形文様を表わし、それを取巻く様に一〇個の小菱文を編出している。身の方には文様なし。縁はえごの木と思われ黒漆塗りである。革帯を納めた箱である。

○柳行李の材料は柾柳こしやなぎで通常の柳ではない。

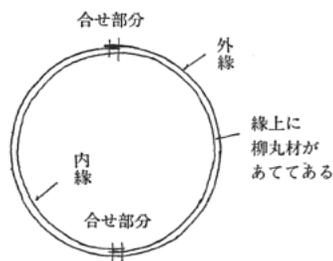
○破損なく保存状態完全であり美しい箱であり、縁巻は柳材で三本巻止めで、蓋二四個所・身は一五個所(但し一ヶ所間隔が広いところあり)止めている。又外縁と内縁の合せ部分が対称の位置にある(挿図10、通常は外縁合せより内縁合せはやや右に位置するものである)。

○円形に整形するために左右をしぼり編んでいるが、その技術が優れている。恐らく型を使用したものと思われる。

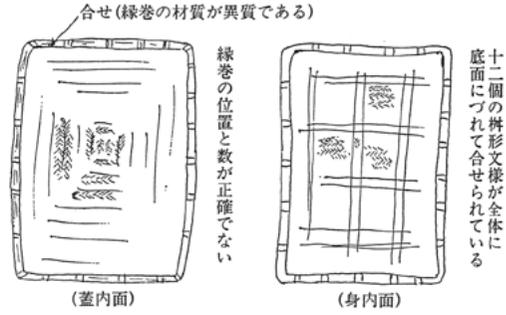
## (ロ) 中倉一三三 柳箱

寸法 蓋 径二〇・三、横一四・〇、高五・二

柳箱



挿図10 中倉91 柳箱の縁



挿図11 中倉133 柳箱

十二個の枳形文様が全体に底面にづれて合せられている

身 堅一九・〇櫃、

横一三・〇櫃、

高六・七櫃

(造り) 今日の柳行李と

同じ造りで縁も柳材で柳材

の縁巻で巻止めてあるが黒

漆塗りである。内側は網代

編で編み二重編みである。

形は方形蓋物で蓋・身共に

全面銀粉の如きものが附着

している。

○表は蓋・身共に柳行李と

同じく編み文様なく、内側の網代編みは蓋・身の文様を異にする(挿

図11)。蓋文様は中心に枳形文を一個表わし三本網代で編み円心的に

中心の枳形文を取巻いている。しかし三本網代の流れが連続している

ユニークな表現である。身文様は底面に一二個の枳形文を編出し側面

は堅面四個・横面三個の枳形文を表わしている。しかし編組技術は不

正確である。

○縁は蓋・身共に同じく木材と思われるが、黒漆を塗装している為材質

は不明である。刃物の削りあとが変化あり、又角の曲げは折る様に急

角度に曲げ特に内縁は折り撓め技法である。恐らく非常に柔軟な素材

であろう。縁巻はえごの木と思われる位置が不正確で巻数も各辺異なる。

二本巻止めと三本巻止とあり、蓋の内縁の合せの部分の巻材は他の巻

材と異なる材質であろう。

○技術的に見て大変不正確の部分あり大陸的である。中国製とも考えられる。

(イ) 南倉六〇 柳箱 (挿図12)

寸法 蓋 径一四・〇櫃、高二・七櫃

身 径一三・〇櫃、高二・八櫃

(造り) 円形の被蓋造りで非常に小形の美しい箱である。保存状態良

く汚れもない。蓋の縁に「納真珠箱」と朱書あり。前述の中倉九一号の

円形柳箱と同様型を利用して造られたと思われる、技術も同様であるが、

こちらは柳材が二本合せを一本として編まれ、中倉九一号は一本編みで

ある。非常に細い柳材(巾一・五耗―一耗)で編まれている。

○縁材はえごの木であろう、しかし漆は塗らず素地のままである(材巾

一櫃厚さ〇・二耗)。縁巻は柳材で四本巻、一〇個所巻止めてある。

(材巾二耗―二・五耗)

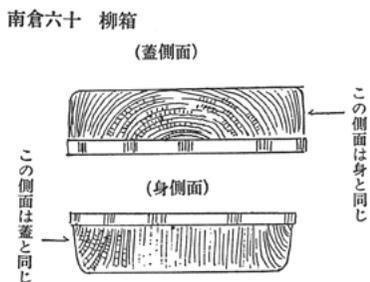
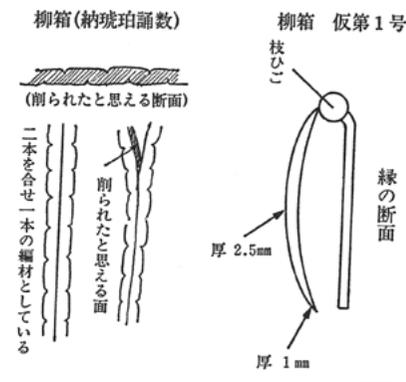
○円形の形整い両端の側面のまともが非常に優れて美事である。

(ニ) 南倉五五 柳箱

寸法 蓋 堅・横九・四櫃、高三・四櫃

身 堅・横八・六櫃、高三・六櫃

(造り) (正方形に近い)方形被蓋の箱で、二本合せ柳材で編んだ美し



挿図12 中倉202 柳箱 仮第1号 緑断面 (上右)

南倉55 柳箱 合わせ材の使用(上左)  
南倉60 柳箱(下)

い小箱で蓋に「琥珀誦数一條會前」と貼紙あり。

○二本合せの柳材は内側の面を削り二本を一本に合せてある様に観察される(挿図12上左)。もし削ったとすると誠に美事と言うほかはない(材巾一耗一・五耗)。

○縁材はえごの木、巻材は柳材で縁巻の巾の広いものは三本巻止、せまいものは四本巻止・五本巻止めとしている。縁材巾○・八種

(㊦) 南倉六一 赤漆柳箱

寸法 蓋 縦三〇・〇種、横一九・〇種、高四・〇種

身 縦一九・〇種、横一八・〇種、高四・五種

(造り) 方形の被蓋の小箱で柳行李と同じ技術であり材料二本合せの柳を一本として使用している。全面に赤漆を塗り縁材は茶褐色漆で塗り

固められている。誦数管と伝えられ白紙の嚙くはを入れる。

○非常に美しい箱で微かの破損あるも、完全に近い保存状態である。漆塗りのため非常に堅牢である。材質は柳材と思われ縁は他の例からみてえごの木であろう。しかし漆塗りのため観察不可能である。

(㊦) 中倉二三 柳小箱 仮第六八号(六九号櫃)

寸法 縦一一・五種、横一一・五種、高九・〇種

(造り) 蓋はなく身のみ。柳行李と同じ造りで二本の細い柳材を一本にまとめ編まれている美しい小箱である。漆は塗らず木地のままで、側面堅糸が切れ破損あるも姿は正方形を保っている。

○縁材はえごの木であるが縁上にあて材は柳の丸材で、角を曲げるために爪あとの様なへこみをつけ、折れずに正確に曲げられ技術は優れている(緑巾一種)。

○縁巻は柳材を薄く削りたるもので、各辺共四本巻止めで四個所止めている。

○縁の合せ部分は外・内共に角に近い。

(㊦) 中倉二〇二 柳箱 仮第四八号(一一六号櫃)

寸法 縦三二・〇種、横三四・〇種、高八・七種

(造り) 破損甚しく蓋か身か不明である。他の柳箱と同様の造りと思われ、柳材二本を一本にまとめ編まれている。長方形の漆塗装なき箱である。

○縁材はえごの木、巾一・六種、合せ部分は外・内縁共に一個所で、

縁巻は柳材と思われ、細い巻材では六本巻止、巾やや広き材では五本巻止めである。縁上の縁あて材は柳の枝の丸材を使用。外縁に朱書にて「納入勝箱」とあり。

(イ) 中倉二〇二 柳箱 仮第一号(二一九号櫃)

寸法 蓋 縦四二・五寸、横四七・七寸、高一〇・七寸

(造り) 破損甚しく、縁によって辛うじて原形をとどめている。被蓋の長方形の箱で編材は柳材で他の柳箱と同様の手法で編まれていたものと思われ、漆塗装はない。

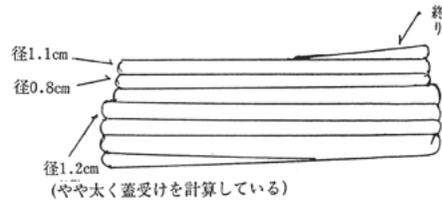
○縁材はえいごの木である。蓋・身共に縁巾二・五寸。厚さ中心で二・五寸あるが美事に角を曲げている技術は優れている。縁止のあて縁材は柳材の枝の丸材で元の太い部分と先端の細い部分が合せとなっているのが観察された。縁の合せ部分は外・内縁共に各々二箇所となっている。○縁巻は柳材の薄いものを蓋八本巻止、身は七本巻止めで、各辺五箇所巻止めている。

(結び) 以上柳箱八點調査の結果何れも基本の技術は今日の柳行李の製法と同じく、材料も柳材を用いているのだが、一本の素材と二本を一束として用いているものと両様あり、又円形と方形・長方形と形を異にし、非常に繊細な小箱もあり、工芸的に見て優れている事が確認された。漆塗装のものは非常に堅牢で美しく今日でも破損のない事が注目された。特に円形の箱は技術が優れていると思われた。

(蓋側面図)



(身側面図)



挿図13 南倉72 蘭箱

(四) 蘭箱、斑蘭箱蓋

(イ) 南倉七二 蘭箱 (挿図13)

寸法 蓋 長径三一・八寸、短径一七・五寸、高四・八寸  
身 長径三〇・五寸、短径一六・八寸、高七・四寸

(造り) 蘭を束ねて芯とし棕櫚の葉で巻き、渦巻状に底より編みつなぎ、<sup>ふたもの</sup>盒としたもの。長楕円形に成型し被蓋の盒である。総体の形美しく技術的に優れた箱である。

○蘭(りん・る)莞の属。水田に生ずる草、葉は線状をなす、織りて席と為す。

燈心草、莞はる・まるがま(莞蒲)。湿地に生ずる一種の草、葉は線状長さ四・五尺に至り中にずるを含む、織りて席につくる。みむしろ。

棕櫚(樓櫚)、蒲葵(檳榔)、どちらか不明であるが葉で扇等作る(以上、『字源』による)。

○芯材も巻材も椰子科であり棕櫚か檳榔であろう。中心から巻始め縁で終る技術は優れ、よく纏められ特に巻終りの部分の技術は美事である。  
○蓋うけの立あがり部分が良く計画されている。恐らく南方系の輸入品であろう。

(四) 中倉一三四 斑蘭箱蓋

寸法 径一七・二種、高二・九種、縁厚〇・九種

(造り) 円形の箱で蓋のみのこる。蓋の表は褪色しているが、内側は蘇芳色・黄色と染料の色残る。材質は芯に稲科の材を用い、ヤシ科植物の葉にて巻き、中心の文様編みを渦状に丸帯状の材料にて巻き成型している。中心は漂白したものと蘇芳染のものと黄色染のものと三色にて三角文様を大胆に表わし、丸帯状の巻材の処々に蘇芳染の部分も表わしている。四方に白と蘇芳染との染分けたもので三角文様を表わした美しい箱である。

○中心の座編み技術良く、色彩・技術・素材の点から見て恐らく輸入品であろう。今日地方民芸として我国にもこの技術が残っている。

(四) 大乘雑経帙・斑蘭帙

(イ) 中倉六〇 大乘雑経帙二枚

(その一) 寸法 縦辺五四・五種、横辺三一・〇種

(造り) 黒褐色又は紺色・褐色・淡褐色の三色の単子葉植物を経とし、やや大撚りのものを緯として編む。今日の畳表と同じ「ござ編み」であるが畳表より細かく、約五〇種の長さがあり珍らしく良質のものである。非常に格調の高いものである。

(表) 「大乘雑経第十一帙」・(裏) 「阿差末経等十一巻」と墨書した木牌が朱色の紐にてとりつけられている。

○黒色(紺色)褐色等に染めたと思われ褪色しているものの美しい。

○縦紐の現われているのは横織が脱落してしまったために表出している。紐は麻の様に思われるが明確でない。

縁の部分は縦紐を二本づつ結び、横織は片方は折返し他方は切りはなし、その上に糊状のもので和紙と思われるものを用いてはりとめた形跡がある。

(その二) 寸法 縦辺六〇種、横辺三一・五種

(造り) その一と材料・色彩同じである。

(表) 「大乘雑経第十三帙」・(裏) 「寶女所問経等九巻」と墨書した木牌がつけられている。

○単子葉植物の材料はその一と同様非常に良質で細い。

○縁ばりは破損するも、その一より保存状態よく縦紐の間隔は狭い。そのために横の織り山が高い。

(四) 中倉六三 斑蘭帙 二枚の内一枚

寸法 縦辺五一・五種、横辺三〇・五種

(造り) 大乘雑経帙の表と同様の織りで材料は非常に細く良質で美しい。カヤツリグサ科植物といわれる。黒色(紺色)と原色のままのものとして「市松文」の織であったであろうと推定される。縁は両端共に切りはなしている。縦紐は結ぶか又は折返してある。

(イ) 龍鬢袷筵・龍鬢碧絶縁筵・褥心筵・蘭筵・蘭筵褥心・斑蘭細長筵・御床畳残欠・履・白絶帯残欠・赤漆胡床・花籠の縁下材・緋絶鳥兜残欠・鳥兜残欠

(イ) 中倉二〇二 龍鬢袷筵 仮第一号(七四号櫃)

寸法 長二四二種、巾一〇六種

(造り) 今日の畳表と同じものであるが、表裏二枚合せて表は細かく麻繕糸を緯とし琉球式に織る。麻繕とは麻糸をよりたる事、材料の蘭も最高のもと思われ元と先の太さの差がなく、三―二本置きに染めた材料が織り込まれて文様を表わした美しい筵である。裏は荒く織られ一―二本置きに染材を使用している。そして縁で二枚合せている。裏の緯は藁縄である。

(イ) 中倉二〇二 龍鬢碧絶縁筵 (九五号櫃)

寸法 現存の長さ一七〇種、巾一〇七種

(造り) 蘭筵の縁は藁縄で蘭一本通の琉球織である。縁は二本を一目の芯としてその間に材料不明の中のあるものをはさみ、経としている。そのためにご目織目が平らに形よく織り上っている。

〇二〇櫃の中に織目が一五本(現今の畳表は一四本)非常に細い織目と言える。

〇両端の片方は打返し他方は切はなしである。

〇裏は継目が明瞭に観察される。

(イ) 中倉二〇二 褥心筵 仮第一号(九五号櫃)

寸法 長二二五種、巾一〇四種、縁巾一四種

(造り) 恐らく筵のまわりには四方に一五種巾のあしぎぬを縫いつけてあったものと推定され縫糸及びあしぎぬ残片が残存している。織りは完全なまま保存され破損なく長方形の巾の広い筵である。

〇非常に巾の広い筵で中央の織目は広く(一目二・二種―二・三種)両端に行く程巾せまく織られている(一目一・四種)理由は不明だが美的に考えられたものか。

〇四方の端には一五種巾のあしぎぬをかぶせ貼りにして(又は縫いつけ)回してあったと思われる。

〇織目は蘭を一本置きに染めた材を織込んでいるかの様に観察されるのだが、蘭の元は葉で包まれているもので当然芯は白色である。従って葉で包まれていない部分先の方は青色である。その部分が茶褐色に変色したとも考えられるので染材の様に見えるのではないか。確証はない。

〇縦紐(芯)は稲藁と推定

(イ) 南倉一五一 蘭筵 一〇帖の内第一号

寸法 長二六一種、巾二九種

(造り) 他の筵と異なり非常に巾のせまい、長さの長いもので、現在の備後表の如く縁に緑色のあしぎぬを廻し裏に六ヶ所同色の紐をつける。恐らく長い台状のものに敷くためのものであろう。

○藪は良質で裏に折返し切口が観察された。

○裏紐二個所欠損

(イ) 南倉一五二 藪筵褥心 参束の内

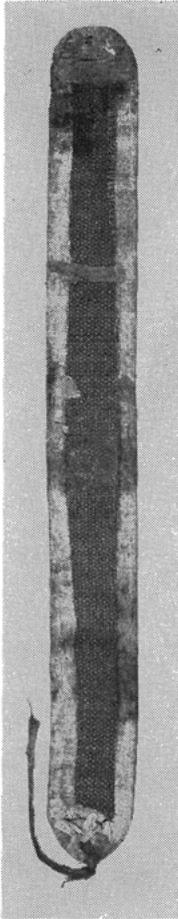
寸法 長二四〇種、巾一〇三種

(造り) 途中つなぎのない良質の藪を用い、一本置きに染材らしき藪を用う(但し前述の如く細い材は変色したとも考えられる)。中央に大破損あり。破損の部分は表面に和紙らしきものを貼り中に竹皮らしきものを入れ、外れることを防止している。

○縁はあしぎぬなく耳の部分は織返し部分と切断部分の二枚を合せている。従って脱離する心配はない。非常に美しく仕上げられ当時の筵織技術が優れていたと同時に発達していた事を物語っている。

(ウ) 南倉一五二 斑藪細長筵 (藪筵褥心参束の内)

寸法 長二三三種、巾一五・五種



挿図14  
南倉140  
白繩帯残欠  
第1号

(造り) 染藪を以って三本置きに市松に織る。染藪と思われる材は皆

細材である。前述の如く変色説と考えれば、当時は緑色と白色との市松とも想像される。研究の余地があると思われる。

(イ) 中倉二〇二 御床畳残欠 第一号

寸法 巾一一八種

長一片約二〇種、一片約一〇六種、一片約二四種

(造り) 聖武天皇・光明皇后の寢室の御床の畳とみられている。真孤六枚合せて表を藪筵で包み込み今日の畳床の様に作られたものである。

真孤は径五耗の太さのそろった上質の材料で表の藪は返し織にし裏側で両端を切断されているところを見ると非常に長い上質の藪である事が確認された。即ち表側の中央に継目のない様に織り、背中のあたるところに違和感を感じぬ様に配慮されたものと思われる。誠に神経の行届いた作りであることに感銘せざるを得ない。表の藪筵と真孤との間に太あみの麻布が敷かれていたのが観察された。当時は保温と弾力とをそなえた最高級のマットであったと想像される。表筵と真孤の綴付けは皮紐を使用したらしく、残欠があり綴付けの穴が観察された。

(ウ) 南倉一四三 履 三両一八隻の内

寸法 内敷の長約三〇・〇種、巾約八・〇種

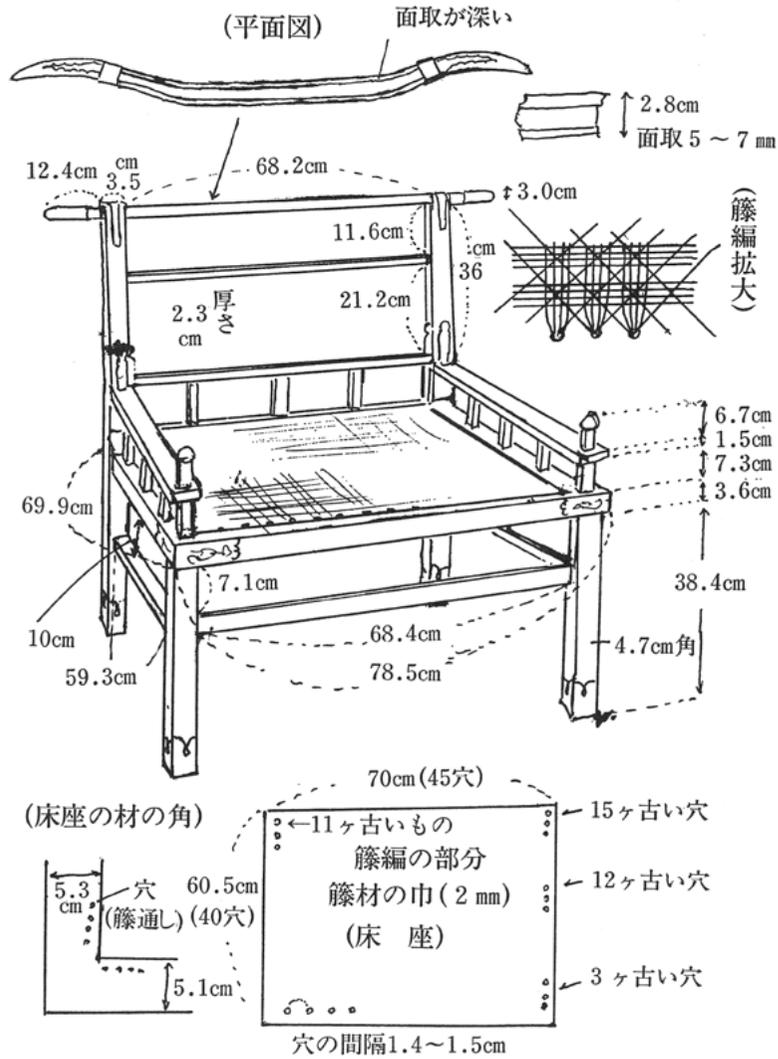
履 長約三〇・〇種、巾約一二・五種、

高約一一・〇種

(造り) 当時の履物で中国の様式である。

(1) 南倉一四〇 白縄帯残欠第一号(帯残欠四裏の内、挿図14) 寸法 長一一二種、巾一一二種

履の内敷の芯に藁材による筵を二枚を入れ麻布で包んでいる。



挿図15 南倉67 赤漆楓木胡床

伝わり用いられているが、編組の技法が異なる。  
○恐らく古材は巾の広い藤材を使用していたものと思われる藤を通す縁材の穴は大きくあけられているが、磨滅して大きくなったとは考えられ

床座は藤材の編組したもので、今日の椅子家具にもこの方法が

で、角・脚・等に金銅金具を装着し金銅釘で止めている。総体の姿が安定した美しい胡床である(胡床はあぐらをかいて坐す床の事を言う、明治年間に残材を集めて復原製作されたもの)。

(造り) 楓材(樺材)赤漆塗り

寸法 床の高四二種、広七八種、深七〇種

(挿図15) 南倉六七 赤漆楓木胡床

(造り) 巾広の帯で藁筵の細いものに表より白縄をかぶせ包み、裏にてとめてある。又片端に麻紐がつけられている。伎楽装束のための帯である。

ない。従って巾の広い籐材を使ったと推定する。又現在編組されている籐床では人間の重量を持ちこたえる事は不可能である。籐編は八ツ目編みに斜め十字文を編出している。

(㉒) 南倉四二 花籠 第一号

○竹材材質調査に於て調査『正倉院年報』六〇済であるがこの度は前調査で不明であった縁の止め材を再調査した。結果アケビ属(蔓莖)と確認する。

(㉓) 南倉三 緋繩鳥兜残欠 其の一

○竹材材質調査の際調査済で、その度は材質柳材と推定したが、今回針葉樹である事を確認。

(㉔) 南倉三 鳥兜残欠 其の三

○調査済の為、この度は芯材が籐材と推定されたものに対し観察する。結果籐材である事を確認する。

(結び) 以上藺を使用したもの内、箱類二点・帙三点・筵七点・履・帯および胡床・花籠の止め材・鳥兜と多種にわたり観察調査させて戴いたわけであるが、一応編組されたものを纏めて見たのである。結果、藺を使用したものは全て良質の藺であり、技術的に優れている事には驚きを禁じ得なかった。特に今日の備後表と琉球表の如き形式がこの当時に始まっているとは思われぬが、縁に繩を使用したるは上質のもの、縁のないものはやや粗材のものを使用しているところは今日と類似して居り、誠に考えさせられたのである。そして当時この種の植物を多種にわ

たり研究利用されていた事にも改めて感銘させられたのである。

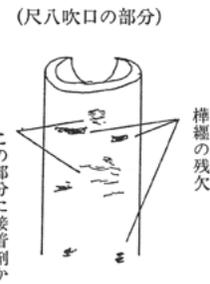
二、纏材又は巻材として使用されたるもの

樺纏尺八・弓の樺纏・樺纏刀子・仮斑竹杖・瑠璃丁字形八角杖・黒作大刀

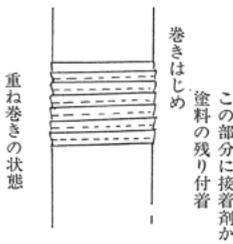
(一) 北倉二二 樺纏尺八 (挿図16)

○竹材調査で調査済であるが纏材不明の為再調査となる。種々と疑問点あり、ほぼ桜皮と推定出来るところもあるが確認は出来なかった。

○非常に薄く作られた材である為、視覚的解明が困難であった。



(尺八吹口の部分)



挿図16 北倉22 樺纏尺八

○この巻材は吹口部分より巻始め重ね巻きにされて居り、皮下に接着剤を使用し、巻かれた上から塗料を塗られたと思われる様に観察された。

(二) 中倉二 槻弓 第二二号  
寸法 弓長一八八・〇厘、太三・〇厘



寸法 鞘長二二・七寸、把長一一・七寸

(造り) 把は黒色の犀角で樺纏二ヶ所。柄頭に黄金の金具(但し修補)を装着する。

鞘は総体漆塗りで鯉口及鐙に黄金金具(修補)を装着し、五ヶ所に樺纏し、下部に水晶及ガラス玉をはめ込んだ美しい刀子である。尚修補は皆明治時代である。

○把の樺纏は二ヶ所の内一ヶ所修補、鞘の樺纏は五ヶ所の内三ヶ所修補。鞘の上方部の漆塗も修補である。

(イ) 沈香把仮斑竹鞘樺纏金銀荘刀子 第一四号

寸法 鞘長一七・九寸、把長一〇・七寸

(造り) 把は沈香木を使用五ヶ所に樺纏。鞘は仮斑竹の上に八ヶ所樺纏し、吊金具及鐙に黄金と銀金具を装着した美しい刀子である。但し前回竹材材質調査に於て調査済であるので今回は樺纏のみの観察とする。

○把の樺纏は香木のひび割れの為やや損傷あるも美しく纏かれている。即ち巻数を違えて変化の美しさを表現した配列である。

○鞘の樺纏も変化のある配列で、樺纏材が非常に薄く作られているため仮斑がすけて観察される。

○この種の樺纏材は使用されている宝物多く、明確な判定は出来ないが桜皮材の感触がある。

#### (四) 南倉六五 仮斑竹杖

寸法 全長一六〇・五寸、径上二・五寸、径下二・〇寸

(造り) 昭和五十五年材質調査に於て調査済であるので、今回は巻材について調査した。

○樺纏の材質は刀子のものと同質と思われる。

○籐巻の籐は皮つきで石突の樺纏は新補であるが籐は新旧判別し難い。

(ウ) 南倉六五 瑠璃丁字形八角杖 (挿図18)

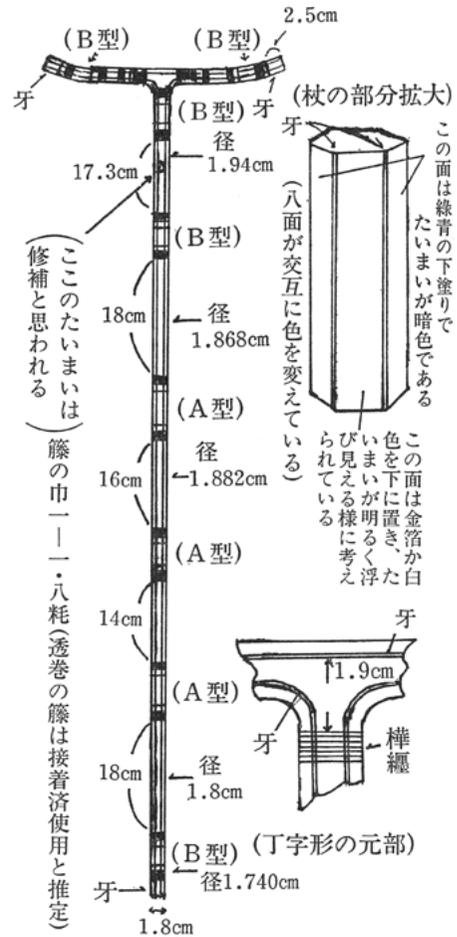
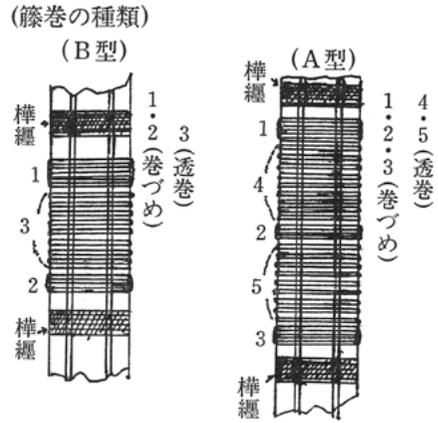
寸法 杖長一三五・五寸、横木長三四・五寸、径一・九寸—二・二寸

(造り) 恐らく木芯を八角形に削り金箔・白緑色・青色に塗り、その上から瑠璃を貼ったと思われる、角(稜線)には象牙を細く削ったもの(約一耗)を象嵌し八角の稜線を表わしている。樺纏と籐巻とを交互に配列し非常にバランスよく裝飾性豊かな美しい杖である。美術工芸品としても誠に優れた宝物であると思われる。

○丁字形附近の八角即ち杖の上部の径と、石突近くの径とは微かな違いがあり、石突の方が細い。

○杖の側面より観察すると杖全体にゆるやかな美しいカーブを見る事が出来る。かつて真直なものが時代と共に反って来たものか、又は計画されて作られたものか不明であるが、計算された如き美しいカーブである。

○籐巻・樺纏の多くは新補(明治三十五年五月修補)とあるが新旧見分け難く旧物と見られるものは横木の樺纏三節のみ、籐には旧物らしきもの



挿図18 南倉65 瑠璃丁字形八角杖

はなく、飛ばし巻きが美しい。

(丙) 中倉八 大刀

(イ) 黒作大刀 第一五号

寸法 大刀全長八一・〇種、巾四・一種、厚一・四種

(造り) 把には中央に脱落した紐がとりつけてある。恐らく金具に装着されていたものであろう。把を巻いている紐材は藁と麻で、総体木芯黒漆塗りであり、装着の金具は全て鉄製で素材なシンプルな大刀である。鞘の下部の漆は剝落している。

(甲) 中倉八 黒作大刀 第二五号

寸法 大刀全長七九・五種、巾三・五五種、厚一・三五種

(造り) 把は木地で柄頭に金具、鞘は黒漆塗りひび割れあり。鐔・吊金具・下部金具・鍔金具は全て鉄製である。

吊金具に鹿皮を結びその先に麻縄を装着している。鹿皮の一部に古い鹿皮が残り、他は新補である。

〇把の鐔近く樺纏材と思われるもの一本巻かれている。装飾の為か、不明であるが材は尺八の纏材と同じと思われる。

(結び) 以上樺纏材・籐材・藁・麻材を巻材として使用している九種類の宝物を調査し終り、その全てが美術工芸として優れている事は勿論の事であるが、その計画性とデザイン力には感銘せざるを得ない、特に

素材を良く研究し、適材適所に利用している柔軟な姿勢は注目すべきものがあり学ぶべき事が甚大である。樺纒材に於ては未だ明確な答が出ないが、桜材の線が強いと思われ、尚研究の余地がある。

### 三、植物繊維による諸種繩

繩断片・佐波理匙の繩・新羅琴の麻繩残欠・革帯残欠の麻緒・樹皮繩三束・木綿一束・鏡の紐緒

#### (一) 中倉二〇二 繩断片一括(第一一七号櫃)

(第一号) 稻藁 径一・二櫃、径〇・八櫃、径〇・七櫃

○繩のよりが雑である

(第二号) 稻藁 径一・一櫃

○繩のよりが良い

(第三号) 稲ではない、カヤツリグサ科の一種という。径〇・九櫃

○繩のよりが良い

#### (第四号) 一、麻

二、麻か

三、麻に近い

四、こうぞの靱皮繊維

#### (第五号) 一、麻

二、みつまたの類(和紙の材料)あるいは沈丁花科(ダフネ)の

靱皮繊維らしい

径〇・四櫃

(第六号) 麻(青色着色)

径〇・六櫃

(第七号) 麻布で包まれた繩で稻藁である。径〇・八櫃、袋径一・三

櫃

(第八号) 特殊な事に使用されたものか原色・茶褐色と二種類を繕り

繩としている。一種類は稻藁。もう一種は木材を繊維に加

工したらしい。二ヶ所に和紙が貼られ非常にしろいと思わ

れる。

径〇・六櫃

(第九号) 第八号と同じ材質と思われ青色に染められている。径二・

五櫃

(二) 南倉四五 佐波理匙 第一号 一束

寸法 円形匙 径六・〇櫃、柄長一九・〇櫃

木葉形匙 長径七・〇櫃、短径四・〇櫃、柄長一八・〇櫃、

重量七七二瓦

(造り) 円形・木葉形匙あわせて二〇枚を一束として柄の部分で

二ヶ所結んである。その纏紙と編紐。纏紙は中倉二〇二の繩断片第五号

の二に酷似。紐は麻材と推定。

(㉔) 南倉一〇〇 新羅琴

寸法 総長一四六・三、槽巾二七・二、頭筭長三〇・〇、槽裏の割入 長一一〇、巾一五

〇麻繩及残弦 麻繩は三糸左纏りで一繩の端には弦が残存する。弦は三糸左纏りである。

〇材質 麻繩である事を確認する。

(四) 南倉一四一 革帯残欠の麻緒

寸法 革帯長平均約一五七、巾約三

(造り) 袋状に仕立てられた皮帯の上・下辺に玉縁風に麻緒を刺し通す。

〇其の一九 麻と思われる。一枚の皮を裏で合せ両端に繩を入れ押圧して装着したもので押圧した為と思える小穴あり。

〇其の二六 麻ではない。

(㉕) 南倉一七四―一八 樹皮繩 三束

〇麻繩二束は径〇・六、繩程の繩で、二つ纏りの右繩、長二六、径六、繩程の束にしている。重量一三〇瓦。

〇藁繩は径一・一、繩程の繩、但し三つ纏りの右繩、その一端には団をつくる。長さ二四、径五、束としている。紙捻は共に後のもの。重量八〇瓦

〇観察の結果麻繩一束(第一号)は双子葉植物の樹皮と思われる、一束(第二号)は麻である。藁繩一束(第三号)は単子葉植物であり藁繩と確認された。

(㉖) 南倉一四八―七一

木綿 一束 (函装四)

〇長さ三八、位に折畳み束としている。重量一三九五瓦。

〇観察結果 コウゾ、カジノキ、カラムシ等の靱皮纖維に似る。

(㉗) 南倉 七〇 鏡の紐緒

(イ) 円鏡 第一号

寸法 径二六、縁厚〇・七、鈕高一・四、重量一六五〇瓦

〇鉄漫背鏡の鈕につく緒(明治三十七年に木綿を取付けたと記録する)。

〇観察結果 (㉘)木綿に同じ

(㉘) 円鏡 第二号

寸法 径一四・六、縁厚一・一、鈕高〇・九、重量九三五瓦、

緒長(旧物)一一・〇

〇第一号と同種と思われる。緒の結目一個。

(結び) 当時は材質として化学製品なく、機械も未発達であるから人工的である。従ってあらゆる植物を研究利用したものと思える。

四、其の他の植物繊維を使用したもの

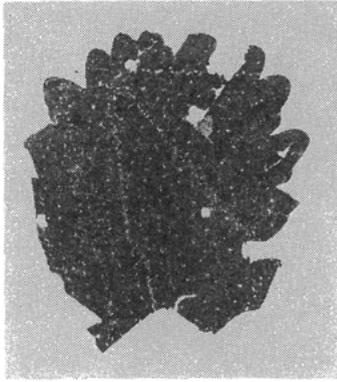
馬鞍の中の植物・華鬘の芯・子日目利箒・経筒・誦教・礼服御冠残  
欠垂飾・椰子の実

(一) 中倉 一二 馬鞍 第二号の鞆の中の檨葉 (挿図19)

○鞍は木材で造られ鞍下に使用される鞆せんの中に何層にも左記の材質が使用されて居り、其の中に檨葉かしわが使用されていた。

縦目の藺筵・白布・横目藺筵・縦目藺筵・檨葉・横目藺筵・白布という順序に重ねられ芯としている。裏に薄い白皮をあてこれらを細い麻糸で綴じている。

○檨葉使用の意味については、嶋倉・村田報告参照。



挿図19 中倉12 馬鞍 第二号の  
檨葉

(二) 南倉一八五 華鬘

(第二二七号櫃 雑第四三)

寸法 結び目より上、帯長

約一二五櫃、巾五・七櫃

結び目より下、帯長約六六

櫃、巾六・七櫃

(造り) 聖武天皇御葬儀用

に使用されたものと思われる。袋状の綾細長帯の芯材に使用されている植物を観察。

○結果 ツヅラフジと言われていたがあげび材と判明。

(三) 南倉七五 子日目利箒 甲・乙(残材は函六七七八にあり)

寸法 箒長六五櫃、把部径三・九櫃

(造り) 甲は樹木の枝(萩の一種と言われていたことがある)、長さ六

五櫃—四〇櫃のものを束ね根元に紫の皮で纏め金糸を巻く。枝先端には瑠璃小玉を各五個つけた美しい箒である。

○乙の紫皮(鹿皮)の表面にはガラス小玉をつなぎその紐で皮全面を巻いたと思われる押型が観察された。

○小玉は白色(ガラス)、碧色(藍色)の二種類のもので枝の先端に装着されているものと、枝の途中に刺し込まれたものがある。『万葉集』巻

二十にみえる、天平宝字二年正月三日の初子の日の儀式に用いられた玉箒に相当すると考えられている、非常に珍らしい裝飾箒である。

○結果 萩ではなくコウヤボウキと確認。

(四) 中倉三三 沈香末塗経筒

寸法 長三七・二櫃、径八・七櫃

(造り) 筒形の胴八角形の木地に漆と沈香木末を混じて塗り固め、無食子・丁字あずきを象嵌の如く塗り込め文様を表現した珍らしい経筒である。

○文様はとうあずきを中心にして丁字を放射状に四個配し一窠の文様を表わ

し、天部は七文様、八角面の斜側面には両面八文様・両側面七文様・下斜側面は両面八文様と交互に配置している。筒両端は八面を三角形の斜面として中心に集め、やや突出している。その各面には四ヶのとうあずぎを中心とした文様と、丁字のみの文様とを交互に表現している。底面には文様はない。

○側面中心で蓋・身と分割され、側面の文様のとうあずぎは七個のうち四個が蓋に、三個が身に交互にずれて象嵌され、文様のデザイン上の配分を考慮している。

○経筒の内側は木材で長方形の箱を嵌め込み、中に金泥・銀泥の花文様を描いている。

○薬物報告書には丁香(漢名)丁字、無食子(マメ科 Leguminosae) のトウアズギ *Abrus precatorius LINNÉ* とあるが、今回の調査ではトウアズギではないとされた。

(四) 南倉五八 菩提子誦数 第二〇号

○木実のもの一〇八枚。ほかに親玉・莊玉・露玉とあるのは紫水晶の事で各一枚・一〇枚・二枚とあり金銅露玉金具をつけている。

○木の実は昭和二十八〜同三十年の第一次調査では中国産のボダイジュとしたが、今回ではその判定は保留された。

(六) 南倉五九 誦数残欠

(イ) 誦数残欠 第二一号 四六枚

○御物目録では菩提子とあり、第一次調査ではビヤクダンと推定されたが結果は不明。

(ロ) 誦数残欠 第二三号 一八枚

○御物目録では菩提子とあり、第一次調査では单子葉植物の球茎(サフラン属或は近似の植物)とされたが、そのようにはみえない。材質は不明である。

(ハ) 誦数残欠 第二五号 一一四枚

○第一次調査では蓮実とあり、中国産か日本産か不明とされたが、観察の結果、蓮実と確認された。

寸法 大 長径一・五糎―一・四糎、短径一・〇糎

小 長径一・三糎、短径〇・七糎

(ニ) 北倉一五七 礼服御冠残欠 垂飾

○御冠の垂飾の残欠である。御冠に芳香をあたえる為か、又は防虫になつたとも思われる。

○とうあずぎと丁字を糸状のものでつなぎ飾とした。トウアズギとされたものは今回否定された。

(ホ) 南倉一七四―二四 椰子実 一枚

寸法 直径一一・八糎、高一〇・六糎、口径三・〇糎、重量一七〇瓦

○椰子実に穴をあけ口とし、彫刻によって人間の顔を表わしている。第一次調査ではココヤシの果核とある。

○観察結果 椰子の実の果核と確認、口の部分は研磨してあり笛ではないかとも思われる。

(結び) 植物学的な調査としては誠に珍しい種類の材質が広範囲に使用されて居り注目すべきと思われる。又工芸品として観察すれば、やはり珍しいものと思わざるを得ない。今日考えられないデザインである事に驚きを禁じ得ない。

### 五、動物質の毛等を用いたもの

伎楽面の毛髪・ヒゲ数種・柿柄塵尾

(一) 南倉一 伎楽面 一七一口の内

(イ) 太孤父<sup>たごふ</sup> 第二七号

寸法 竪内三二・〇浬、横外二二・〇浬、内一八・〇浬

(造り) 「前一 将李魚成作 東大寺 天平勝宝四年四月九日」と墨

書あり。眉・口髭(くちひげ)・頤鬚(あご・おとがいのひげ)

・頬髯(はほのひげ)に長白毛を植える。

○観察結果 動物質の毛と思われる。根元は白色で先は黒褐色である。

(四) 治道<sup>ちどう</sup> 第四六号

寸法 竪内二七・〇浬、外三二・五浬、横内一八・八浬、外二四・〇浬

(造り) 頭に茶褐色の毛を三段に貼る。眉鬚・頭鬚は墨書きである。

○頭髮は下に墨で描き、天部より毛を植えて三段になり、後頭部の毛は椰子の木の毛状の部分を使用したと思われる。

○植毛は三段に接着剤(漆と思われる)で塗り固められている。

(イ) 獅子 第一二七号

寸法 頭長四〇浬、頭径三三浬、高二七浬

(造り) 顔面全面に褐色の毛を貼る。口唇の縁には植毛の跡残り、後頭部にも毛を貼る。

○観察の結果 動物質の毛と推定。あごひげはくさびで打込み植毛したものである。くさびの残欠残存す。頭部・顔面は接着剤で貼ったものと思われる。

(二) 南倉七四 ヒゲ数種 (古櫃第一八八号中のもの)

○藍染の毛 長二〇浬、黄染の毛 長二五浬、黄褐色の毛 長二三浬、

赤染の毛 長一七浬、白色の毛 長一五浬

○前調査では皆動物質の毛とある。

○調査結果 藍・赤染の毛は植物である。即ち天然染料で染まるものは植物質と推定。黄・黄褐色・白色の毛は毛一本の中を観察すると髓の様なものが見られる。表面は非常になめらかである。恐らく植物と思

われる。

(三) 南倉五〇 柿柄塵尾

寸法 塵尾長六一・〇 糶

(造り) 柿の木の板で毫毛をはさみたる拂子である。柿の木の板には牙の裝飾あり。毫毛は黄褐色で毛の端は紫色を呈している。染めたものが天然のものか不明である。

(結び) 以上植物・動物を利用し毛髪と見立てる事の出来得るものを選択し、用いた研究技術は注目すべきものがあると思われる。特に柿柄塵尾は工芸的に見ても優れたものと言えよう。

(昭和六十一年八月記、重要無形文化財保持者)